

Euphonium 大山智 プロデュース

Jan Bach トークライブ!!

ミュージックスクール「ダ・カーポ」地下イベントスペース

2023 年 7 月 1 日 (土) 開場 16:30
開演 17:00

[第1部] Jan Bach 演奏のポイント① 60分間

17:00	挨拶 趣旨説明 (大山)
17:05	▪ Tema (大山・齋藤・小久保)
17:20	▪ Var. I – III (大山・齋藤)
17:40	▪ Var. IV – VI (大山・小久保)
18:00	休憩 15分間

[第2部] Jan Bach 演奏のポイント②とレクチャーコンサート 90分間

18:15	▪ Var. VII (大山・齋藤・小久保)
18:40	E. Boccalari / Fantasia di Concerto (小久保)
18:55	J.N.Hummel / Fantasy (大山) A.Désenclos / Suite brève dans le goût classique (大山)
19:25	G.P.Teleman / Fantasia No. 7 (movements I and II) from 12 Fantasias for Violin (齋藤)
19:45	終演予定

[出演] Euphonium 大山智、齋藤充、小久保まい Piano 大川香織

主催：Jan Bach トークライブ!!実行委員会
協賛：株式会社グローバル、管楽器専門店 ダク
後援：日本ユーフォニアム・チューバ協会

Jan Bachトークライブ!! エッセイ (小久保まい)

【Jan Bachのココが好き!】

- ・1970年代、超とんがった現代曲で特殊技法たくさんの曲が生まれてきた奇跡 (笑)
- ・テーマのエネルギー運び、ユーフォとピアノの掛け合いがとにかくカッコいい
- ・III. Ripresa の最後、ユーフォとピアノが初めてユニゾンになってカッコいい
↑多分そこしかピアノとユーフォのユニゾンなくてゾクとする。
- ・VI. Coro の最後、どんだけ爆音吹いても良いところ! ストレス発散 (笑)

【コンクールでのハプニング・失敗談】

- ・管打の本選で、30秒くらい停電。5分くらいに感じた。
(ピアニスト 佐藤友美さんが間奏をゆっくり弾いてくださったファインプレー!)
徹子の部屋で聞いた、クラシックギターの木村大さんがコンクールで停電しても演奏を続けた話を思い出しながら吹いた。
- ・本選行くと思ってなくて、暗譜してなかったこと。
前日にほぼ泣きながら死ぬ気で暗譜、二度としたくない。
- ・コンクール1週間前に、現実逃避? したくて慣れない凝った料理したら指切った!
- ・コンクール会場まで迷子になった。
- ・新しいヒールある靴をコンクール当日に履いたら、重心うまく取れなくて焦った。

【やってよかったコンクール対策・マイルール】

- ・前の日に慣れないものを食べない、当日は熱いもの飲まない!
- ・コンクール前に慣れないことはしない(急な運動とか作ったことない料理するとか笑)
- ・本選曲まで挑戦・暗譜しておく、いつか吹く日が来るかもしれないから。

・ポーマン先生の暗譜術

- ①歌いながらピストン動かす
- ②ピストンだけを動かして指の動きで曲を覚える
- ③楽譜見ずにパート譜をどこまで書き起こせるか(アーティキュレーションも含め)

- ・諦めずに納得するまで挑戦したこと!

(管打コンクールは4回、ファルコーニは5回、チェジュは2回受けました)

1次でダメだったこともあったけど諦め悪く受け続けて、今の自分の仕事があると思う。



小久保まい KOKUBO, Mai (Euphonium)

静岡県出身。浜松市立高校、国立音楽大学器楽科卒業後、渡米。
ノーステキサス大学大学院を修了。2012年 日本管打楽器コンクール最高位、2009年レオナルド・ファルコーニ国際コンクール 第3位を受賞。
ITEC 2023 (国際チューバ・ユーフォニウム大会) にてソロユーフォニウム Artist 部門の審査員長を務めた。今年8月、レオナルド・ファルコーニ国際コンクールに、ゲストアーティストとして招待される予定。
これまでにブライアン・ポーマン博士、三浦徹、露木薫の各氏に師事。
音楽表現法を保科洋氏に師事。
現在、洗足学園音楽大学、常葉大学短期大学部、金城学院大学、甲斐清和高校、常葉大学附属橘高校、浜松江之島高校など各非常勤講師。

【替え指のすすめ】

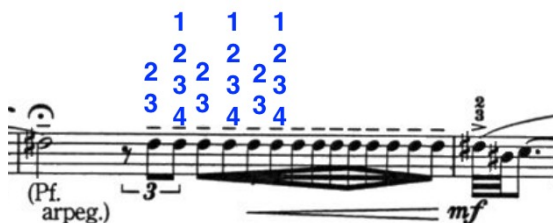
●Jan Bach パート譜 3ページと5ページの「E」

楽譜では [2] [123] [2] [123] だけど、下記の指なら [1] と [2] を変えるだけで済む



●Jan Bach パート譜 5ページの「Fis」

楽譜では [23] [124] 指死んじゃう！これならまだ！



●Jan Bach パート譜 5ページ ハーフバルブの後

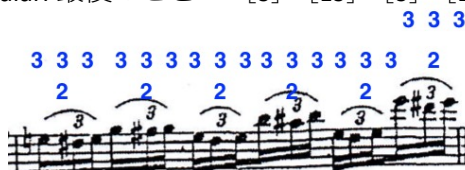


●Boccalari 最後のTempo I の前

[4] を押しっぱなしして A を [124] の替え指で吹くとやりやすい。ポーマン先生より



●Boccalari 最後のとこ [3] [23] [3] [23] バタバタさせていけば、なんとかなる?!



Jan Bachトークライブ!! エッセイ (大山智)

【Jan Bachのココが好き！】

- ・インパクトのあるオープニングが印象的で好き
Tema冒頭のエネルギーに溢れ駆け上がっていく様がやはり格好良い。学生時代は、爆音オープニングでビクつかせるところに燃えていました。(若気の至りということで)
- ・読み込んでいくと新しい世界が広がっていくところが好き
初めて楽譜を見た時は「分からない」「面倒くさい」だったが読み解いていくにつれ表現の繊細さや大胆さ、アンサンブルの楽しさ(難しさも)などの奥深さにはまっていく。
- ・VII.Fuga後半でテーマに戻ってくところが好き
紆余曲折を経て最大級に盛り上がった後に下降してGを鳴らすという所に燃えます。

【コンクールでのハプニング・失敗談】

「ハプニング」

- ・これは海外での体験で、大学4年生の時フィリップ・ジョーンズ国際コンクール(仏)を受けに行ったのですが、現地へ到着したらホテルが予約されていなかった。(私を含め4名) その後、老夫婦のお宅にホームステイ?(全て自炊)するような所を紹介されたもののコンクール会場からは徒歩1時間。主催者の送迎有りだったはずが2日目以降はいくら待ってもお迎えは来ず…結局1時間歩いたり、ヒッチハイクをしたりして行き来していました。スーパーでの買い出しや皆で料理をして過ごせたのは楽しかったです。
- ・別の海外コンクールの話ですが、手が滑って譜めくりが上手くいかず結局最後まで楽譜を見ないで演奏をしました。短い曲だったので覚えていてよかった。

「失敗談」

- ・初めて管打楽器コンクール1次予選を通過した時に、あまりに嬉しかったので気合を入れて練習をしすぎた結果、当日はバテてボロボロ。演奏途中で帰りたくなくなりました。その後は経験を活かしてコンディションをしっかりと整えようと意識をして取り組むことにしましたが、今考えてみれば何をやっていたのだから…と思います。



大山智 OYAMA, Satoshi (Euphonium)

埼玉県出身。県立伊奈学園総合高等学校を経て、東京藝術大学音楽学部器楽科を卒業。2002年第4回別府アルゲリッチ音楽祭にオーケストラメンバーとして出演。

2009年G.リゲティのオペラ「ル・グラン・マカーブル」の日本初演に、バストラランペット奏者として出演。同年、第26回日本管打楽器コンクールユーフォニウム部門にて第4位を受賞。現在は吹奏楽やオーケストラへの客演のほか様々なレコーディングに参加している。ユーフォニウムを池田勇人、佐藤信之、稲川榮一、外園祥一郎の各氏に師事。Vivid Brass Tokyo バリトン奏者、現代奏造 Tokyo 各メンバー。尚美ミュージックカレッジ専門学校専任講師、ミュージックスクール「ダ・カーポ」講師。

・失敗ではないのですが、これが最後だと思って管打楽器コンクールを受けた28歳。
（当時年齢の上限は30歳）本選まで進めたものの、そこに至るまではだいふ心がやられていました。2次予選の前から緊張（と興奮？）のせいかあまり寝付けず、途中目が覚めては無意識に「チッ」と舌打ちをしていたり、ある時には目が覚めた瞬間に、「クソッ！」と発言していたりと…。（汚い言葉ですみません）自分にプレッシャーをかけすぎていたのかもしれませんが。

【やってよかったコンクール対策・マイルール】

・たくさん食べる、寝る
自分の感覚としては肉体的、精神的に消耗が激しいので、出来るだけ食べてよく寝るように心がける。（それでも失敗談のようになったりもしますけど）

・思考をポジティブにする
元来ネガティブ人間で、演奏する度に「ここ大丈夫かな」「上手くいくかな」「失敗したらどうしよう」という不安なことばかり考えて演奏していたので、色々な面で不安定な演奏だったのですが、コンクールの時はそこを全て変えることを意識しました。ふとした時に不安感が訪れるのですが、「練習で上手くいったから大丈夫」「失敗しても通り過ぎちゃうからいいや」など開き直るようにしたことで本番のクオリティが飛躍的に向上しました。（そういう思考になるように準備もしっかりしたということもあるのですが）

・暗譜対策
当時は全曲暗譜だったので早い段階で音を聴きながら楽譜を見ないで指を動かす練習をしました。（主に電車移動時など）最初のうちは出来ないところが多いのですが、分からなかったところは楽譜をよく見直してもう1回音を聴きながら…ということを繰り返し行い、慣れてきたらブレスなどもつけて実際に演奏しているつもりで行いました。（楽譜のアーティキュレーションも意識しながら）そうすることで頭や体が自然に動くようになり、緊張の中でも乱れることなく演奏できたと思っています。



大川香織 OKAWA, Kaori (Piano)

3歳よりピアノとヴァイオリンを始める。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、同大学音楽学部ピアノ科を卒業。

1994年、第18回 ピティナピアノコンペティション D級 全国大会 第1位金賞、日本テレビ杯・エッソ賞・ミキモト賞受賞。

1995年、第49回全日本学生音楽コンクール全国大会中学校の部 第1位、併せて野村賞受賞。2004年、2008年、2022年にドイツ・マルクノイキルヘン国際器楽コンクールにて伴奏者特別優秀賞受賞。リサイタル、NHK-FM、CDなどで数多くの演奏家と共演。現在ソロをはじめ、室内楽、管楽器等の伴奏ピアニストとして活躍する傍ら、後進の指導にもあたっている。

これまでに林苑子、柳川守、堀江孝子、遠藤郁子、播本枝末子の各氏に師事。東京藝術大学音楽学部非常勤講師・伴奏助手。

Jan Bachトークライブ!! エッセイ (齋藤充)

「1位を取りたくなかった」

1998年11月、当時大学4年生だった私は、日本管打楽器コンクールで第1位を受賞することになった。その年の夏は練習のしすぎのせいか調子を壊し、さらにコンクール期間中(当時は2週間程度)も好不調を繰り返しながらの、極めて危うい演奏であった。しかも、明らかに足りていない技量、さらに足りていないとすら感じていた自らの音楽性など、数多くの問題点もあった。

当時の私は留学希望で、将来の目標は一生学生などの甘やかされた状態で勉強し続けることであった。特に演奏家として生きていこうという野望もなく(現在もそうかもしれないが)、音楽家としてのビジョンが全くなかった。その時の私は、留学から帰ってくるタイミングでコンクールで賞を残せればと思っていたのかも知れない。

それなので、第1位を受賞して真っ先に思いついたことは「もうこのコンクールが受けられない」ということであった。

実は、再び受けられなくなることも意外にも、コンクールで第1位になるデメリットは実にたくさんある。

1位になると、安易に辞められなくなる。1位になると注目される。1位になると、たとえばできていないことがあると「そんなこともできないの」と思われてしまう。1位になるとプレッシャーになり、自分らしい活動ができなくなる。

1位になるためには、演奏面だけでなく、今後1位受賞者としてユーフォニアム界に必要な人材にならなくてはいけないのである。なぜなら、それを期待して審査員の先生方は第1位の人を推すのであるから。

1位になるには、単に演奏だけがよいのではいけない。人間性、音楽性、頭脳、知識、好奇心、向上心など、多くのことが必要になる。もし第1位を受賞した時点でそれらを持っていないのであれば、何とかして身につけてはいけないのである。そうしない限り、そのコンクールの権威を汚すことになってしまうのである。

それでもあなたは1位を目指しますか？ 目指す覚悟はありますか？



齋藤充 SAITO, Mitsuru (Euphonium)

国立音楽大学卒業、ミシガン大学大学院修士課程、ノーステキサス大学大学院博士課程修了。日本管打楽器コンクール、フィリップ・ジョーンズ国際コンクール、レオナルド・ファルコーニ国際コンクールにおいて第1位。NHK-FMリサイタル、東京オペラシティ主催のリサイタルシリーズB→C、国際チューバ・ユーフォニアムカンファレンス、米国陸軍バンドチューバ・ユーフォニアムワークショップ等に出演。

B-Musicより2枚のエチュードCD、音楽之友社より『もっと音楽が好きになる 上達の基本 ユーフォニアム編』を出版。現在、侍Brass、ズーラシアンブラスメンバー。国立音楽大学、洗足学園音楽大学、東邦音楽大学、昭和音楽大学、尚美ミュージックカレッジ専門学校各非常勤講師。ミュージックスクール「ダ・カーポ」講師。

「1位を目指さないスタンス」

現在の私は、趣味としてボディビルをやっている。

まだ最初にボディビル大会に出てから1年が経過したばかりのアマチュアビルダーである。多くのアマチュアボディビルダーは、大会で勝つためにボディメイクをしているようであるが、私はボディビル大会で勝ちたいなんて一切思っていない。

それなのに、コンテストに出る理由は何なのであろう。

私にとってのボディビル大会出場は、コンテストに向けて最大限の準備をし自分自身の成長を確認する場、そして他人と比較されることにより自分の立ち位置が明確になる場であり、さらにその後の理想の自分へ向けた成長に繋がる経験となるからであろう音楽のコンクールにも、このようなスタンスで挑んでもよいのではなかろうか。個人的な感覚ではあるが、音楽コンクールでもボディコンテストでも、理想の完成系がないまま単に漠然と勝つことだけを目指している人が多いように感じてしまう。

■ 齋藤充 ボディビルプロフィール

2022年マッスルゲート千葉大会ボディビル新人の部にてデビュー。デビュー戦において第4位。2023年シーズンは、マッスルゲート埼玉大会65kg以下級第2位、東京ノービスボディビル選手権大会マスタース 40歳以上の部第1位、同60kg 以下級第3位、東京クラス別ボディビル選手権大会60kg以下級第4位。5戦中4大会において入賞を果たす。自演の曲でボディビルのフリーポーズを演じるという新たなスタイルを模索している。現在、小沼敏雄、須江正尋、加藤直之の各氏に師事。

「コンクールでのよい演奏のための絶対条件」

コンクールに限った話ではないが、単に、練習量を増やしてミスのない演奏がよいというわけではないのは明確であろう。自分の理想があった上で、それに向けた最大限の努力をすること、そして最大限の自分を発揮できる精神的かつ肉体的コントロールができることではないだろうか。

自分の理想が、単に正確なミスのない演奏で、テンポやピッチ、音量などが正しい状態というのであれば、それはものすごく乏しい発想なのであろう。よい音楽には、心を動かすような力がある。まずは、演奏者が音楽の持つエネルギーを理解し、そして理想の音楽観を持ち、それに一步でも近づく努力をする必要があるかと思う。自分のこれまでの経験を基に、他者からの的確なアドバイスを自分なりに情報統合をし、さらに音楽的・歴史的・文化的なことを含ませて、自分なりの音楽を組み立てる必要があるのではないのだろうか。さらに、それを本番で実現できるような身体能力と精神性も必要になることであろう。単に勝ちにいく浅はかな演奏ではなく、このような多様な背景を含んでいるユーフォニアムを演奏を私は期待するし、私自身もそのような複合的な層を含んだ演奏ができるよう向上していきたい。

そのために、日々いろいろなところから多くのヒントを得て生きていきたいものである。

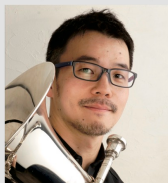


BAND INSTRUMENTS SWITZERLAND INTERNATIONAL
EUPHONIUM

世界を魅了する 豊かな響き ウィルソンユーフォニアム

プレーヤーが楽器に対してパーフェクトな満足と信頼を持つのは大変まれなことです。
しかしウィルソンTA2900モデルは発売以来、世界各国のユーフォニアムソリストたちが絶賛し、
その名前はいち早く世界に広まりました。
アルプスと湖、そして美しく静かな町並みと恵まれた自然の中で、
少数精鋭のクラフトマンが長年の製作経験を生かし1本1本作り上げた名品は、
まさにスイスの自然が育んだ音色の美学と言えるでしょう。

～ウィルソンアーティスト～



齋藤 充
Mitsuru Saito
[使用楽器]
TA2900BS-T



大山 智
Satoshi Oyama
[使用楽器]
TA2900BS



小久保まい
Mai Kokubo
[使用楽器]
TA2900BS-T



👉 カタログはこちら